

2009年6月28日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一 4章 1～11 節

説教題：主はどこにおられるのか

1 最初の戦い

(1) ペリシテ人

続いてサムエル記を見て参ります。ここでは、ペリシテ人と呼ばれる民族が登場してきます。このサムエルの時代、ペリシテ人は地中海に沿った海岸地帯に住んでいて、通称「海の人」とも呼ばれていたそうです。ところが、徐々にペリシテ人は内陸の方にも住むところを探し求めていきます。内陸にはすでにイスラエル人たちが住んでいる。そうしますと、どうしても小競り合いが生じて参ります。

ここではとうとうペリシテ人と一戦を交えなければならぬ状況になります。イスラエルはエベン・エゼルに、ペリシテ人はアフェクにそれぞれ陣地を築きます。川を挟んで、すぐに相手が見える位置関係です。最初の戦いが始まります。しかし、イスラエルは負けてしまいます。約四千人が陣地で打たれました。

(2) 主の契約の箱を持ってくれば必ず勝てる

当時イスラエルでは、「長老」と呼ばれる人たちが指導的立場にありました。敗戦という結果を受けて、急遽作戦会議が開かれます。どうして戦いに負けたのか、その原因を考える。3 節。「なぜ主は、きょう、ペリシテ人の前でわれわれを打ったのだろうか。」

普通こういうとき、軍の参謀は当然、戦略

の見直しや武器などの装備の善し悪しを検討するはずで。ところがこの長老たちは、この戦いに負けたのは、主がそのようにしたからなのだと考えます。

そして、次のような結論に達しました。「シロから主の契約の箱をわれわれのところに持って来よう。そうすれば、それがわれわれの真ん中に来て、われわれを敵の手から救おう。」

自分たちの能力とか力により頼むのではなく、まず神により頼もうとしている。神を中心にした歩みをしているように見えなくもありません。

(3) 契約の箱をかつぐ

善は急げ。早速、シロに人をやり、万軍の主の契約の箱かついできました。何しろ「万軍の主」です。万軍の主の軍隊に勝てる者は地上にはいないはずで。主の契約の箱を見たとき、「全イスラエルは歓声を上げた」とあります。最初の戦いに負け、非常に暗いムードが漂っていました。ところが、今、自分たちを救ってくれるに違いない、主の契約の箱が到着しました。

暗いムードから一転して、もう大勝利を手にしたかのような大騒ぎになりました。人々は興奮し、手を打ち鳴らし、小躍りして、これ以上のない助けが来たと確信しました。

2 エジプトの「災害」を思い出すペリシテ人

イスラエルの大歓声は、ペリシテ人の耳にも聞こえていきます。スパイを出して偵察に行かせる。そのスパイは報告する。「神の陣営がイスラエルのキャンプに到着した模様です。」それを聞いてペリシテ人はこう言います。「ああ、困ったことだ。だれがこの力ある神々の手から、われわれを救い出してくれよう。」

後から出てきますが、ペリシテ人たちも実はダゴンと呼ばれる神々を信じていて、ダゴンのための神社を建てている人たちです。そのペリシテ人は、イスラエルの契約の箱が到着したと聞いて、誰がイスラエルの神から救い出してくれるのだらうと、うろたえます。「よし自分たちもイスラエルに対抗して、ダゴンの神を持って来よう」とは考えなかった。その理由は、次の言葉にある。「イスラエルの神はかつて、ありとあらゆる災害をもってエジプトを打ったではないか。」

イスラエルがエジプトから脱出したのは、このサムエルの時代からさかのぼっておよそ四百年も前のことです。四百年経っても、ペリシテ人たちはイスラエルの神がなされたことを記憶している。そして思い出して恐れる。もうダゴンの神々をもってしても勝つことはできない。そう思っているのです。

神々により頼むことができないのであれば、あとは自分たちの力を信じるしかありません。9節で「さあ、ペリシテ人よ。奮い立て。男らしくふるまえ。さもないと、ヘブル人がおまえたちに仕えたように、おまえたちがヘブル人に仕えるようになる。男らしくふるまって戦え。」奴隷になりたくなかったなら、最後まで戦え。そうやって二度目の戦い

が始まっていきました。

3 二度目の戦い

(1) 「疫病」が起こる

ここまで読み進んできて、私たちは期待します。主の契約の箱が来たのだから、当然この戦いはイスラエルが勝つはずだ。しかし、期待は見事に裏切られ、イスラエルは打ち負かされ、人々は命からがら天幕に逃げ帰る。それだけではない。非常に激しい疫病が起こって、イスラエルの歩兵三万人が倒れたと追い打ちをかけます。

実はこの10節にある「疫病」という言葉ですが、8節の中にある言葉と同じ言葉が使われている。ペリシテ人は言いました。「イスラエルの神は、ありとあらゆる災害をもってエジプトを打った。」その「災害」と「疫病」は同じ言葉。皮肉なことに、ペリシテ人が恐れた災害が、よりによってこんなときにイスラエルにもたらされてしまったのです。

イスラエルは神により頼んだつもりだったのに、戦いに敗れてしまいました。一方、ペリシテ人は神により頼むことなく、自分の力を奮い立たせて戦い、その結果勝つことになった。

(2) ふたりの息子の死

この戦いでホフニとピネハスは死にました。主はサムエルの口を通して、さばきを語っておりましたが、そのとおりになりました。さばきの理由は二つあります。一つには、主にささげられた物を力づくで奪い取り、横取りしていった罪によるものです。

それだけではない。もう一つあるように思います。主の契約の箱がシロから担がれてきたとき、ホフニとピネハスもいっしょに来た

と 4 節に書かれています。彼らは祭司でしたから、当然の任務として契約の箱のそばにいたのかもしれない。しかし、彼らの性格を考えたなら、彼らは慎ましやかに祭司の努めを果たしていたとは思われません。イスラエルの人々の視線は、今や契約の箱に釘付けになっています。彼らがこの機会を利用しないはずはない。彼らがどんなことをしたのか目に浮かぶようです。

普段は、いけにえの規定を破り、生の肉を求めて人々から横取りするような暴力を振るっていました。しかし、国の一大事が迫ると、祭司の服で着飾って、信仰深く振る舞い始める。「これから契約の箱が通っていくのだ。それなのに、なんだその格好と態度は！」そんなことを叫びながら、彼らは契約の箱を利用して、自分たちの栄光を輝かせようとしてきました。

神は高ぶる者をいつまでもそのままにしておく方ではありません。

(3) 神の箱が奪われる

戦いに負けただけではありません。イスラエルの人たちがモーセの時代から大切にしていた契約の箱が敵の手に奪われてしまったという大不祥事が起きてしまいました。

当時、イスラエルにとって、主の契約の箱が奪われることは、国が滅ぶのほとんど同じ意味を持つ出来事でした。イスラエルは、神により頼んだのではないのか。なのに、神はどうしてイスラエルを救わないのか。いや、救うどころか、どうしてこんなひどいことを神はなさるのでしょうか。

次々と疑問が湧きます。

4 偶像を造り出す

もちろん、神はきちんとした理由があつてこのことをなされています。それは何か。もう一度最初に戻って考え直していきます。

長老たちは、こう考えました。「シロから主の契約の箱をわれわれのところに持って来よう。そうすれば、それがわれわれの真ん中に来て、われわれの敵の手から救おう。」

最初、神の力により頼む、すばらしい信仰に見えました。しかし、これと似たようなことを私たちは普段の生活中で目にしています。

皆さんも見たことがあるはずです。車のバックミラーのところに神社のお守りが下げられていたり、あるいは車の後ろに神社の御札が貼ってあったりする。きちんと「交通安全」と大きな字で書いてある。交通事故に遭わないようにということでしょう。御札をぶら下げれば、超自然的な力を持った神々が守ってくれる。そのような信仰を現しています。

お財布の中に御札を入れている人もいます。あるいは下着や服に御札を縫いつけている人もいると聞きました。その人たちにしてみれば、御札が神の御臨在を象徴しています。

私は妻との会話の中で、「教会も御札やクリスマスしめ縄を売ったらどうか」と言ったことがあります。もしかしたらたいそう売れるかもしれない。もちろんこれは冗談で、教会はそのようなものを売りません。御札のようなものには何の意味もないことを知っているからです。

長老たちのしていることは、よくよく見ますとこれとおなじ事をしている。主の契約の箱をまるで御札と同じように考えているのです。

モーセは十の戒めの中の二番目の戒めでこう言いました。「あなたは自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでもどんな形をも造ってはならない。」(出エジプト 20:4)

彼らは、偶像を造ってしまったのです。でも、主の契約の箱は「偶像」ではないと言うかもしれません。もちろん正しい信仰をもって臨むのなら、契約の箱は決して偶像ではありません。しかし、長老たちは主の契約の箱を「自分たちのために」利用しようとしました。「自分たちのために」利用しようとした瞬間、契約の箱は偶像となる。そして彼らは偶像を拝んだことになるのです。

どうして主は、イスラエルを救わなかったのか。それどころか、非常に激しい疫病が起こっていったのか。理由がわかります。彼らは、神を信じているようでありながら、実のところ、全く神を信じていない。神を自分たちの思うように利用しようとしたために、このような結果となりました。

5 主の歩まれた道

(1) 人々の期待と失望

イエス・キリストのことを思います。イエスが来られたとき、多くの人たちは、イエスに期待を寄せました。この人こそ、イスラエルを再興してくださる方だ。この方は必ずイスラエルはローマを打ち負かし、勝つことができる。しかし、結果はどうだったか。期待を寄せたイエスはあっけなく逮捕され、十字架におかかりになり、死なれました。人々が、十字架を見たとき、そこには敗北しか見えませんでした。人々はイエスを自分の思い通りに利用しましたが、そのとおりにならない

ことを見て、失望しました。強い期待が裏切られると、人々の心は手のひらを返すように豹変します。昨日まで「ホサナ、ダビデの子」と叫んで拍手喝采していたのに、今や「神の子なら、十字架から降りてこい」とののしる。私たちはその程度の者なのです。主は十字架で無力となられ、死なれます。墓に葬られていきます。完全な敗北に見えました。

それと同じように、主の契約の箱は、人間の願望のままにあちらこちらに担がれていきます。ペリシテ人はそれを見て、「男らしくふるまって戦え」と叫びました。その結果、契約の箱が奪われていく。神は、人間の力、努力、精神力に負けてしまったかのような情けない状態に見えます。人々の罪の心に翻弄されていくような状態です。イエス・キリストが歩まれた道と全く同じです。

(2) 主はどこにおられるのか

主はいったいどこにおられるのでしょうか。そのことを最後に考えます。

ルカの福音書 4 章 40 節にこうあります。「日が暮れると、いろいろな病気で弱っている者をかかえた人たちがみな、その病人をみもとに連れて来た。イエスは、ひとりひとりに手を置いて、いやされた。」

この人たちは、イエスを利用しようとして来たものではありません。愛する家族が病気で苦しんでいる。その病を何とかいやしてやりたい。その一心でイエスにより頼もうとしてやって来ました。夜にならなければ外に出られない。強い偏見の目があったので、その目から逃れるようにしてやって来た人たちです。イエスは、そんなけなげな思いをもってやって来る人たちの心を決して捨て置く方ではない。ひとりひとりのからだに手を置

きながら、丁寧に丁寧にいやされていくのです。小さな者、弱い者、苦しむ者、できなくなっている者、悲しむ者、そのような人たちにこそ、主は御自身を現してくださる。そういうお方です。

そうしますと、長老たち本当はどうすればよかったのでしょうか。主の契約の箱を担いでくれば。でも、そこには自分の弱さを悲しむ心は一つもありません。主が待っておられたのは、私たちはできない者ですと、弱い者ですと主に告白する心ではなかったのですか。

(3) 主は何をされているのか

契約の箱が奪われた時、神はどうされたのかと考えます。神は平然とされていたのでしょうか。いいえ。そもそも、主の契約の箱はモーセをとおして、神がイスラエルの民に与えた大切な宝です。救いの契約の象徴です。それほど大切なものが奪われてしまう。神がこのことを痛み苦しまないはずはない。

この戦いで四千人が倒れ、三万人の歩兵が疫病で倒れました。この人たちはどうなったのだらうと思います。やっぱり平然としておられたのか。いいえ。ご自分の羊が倒れていくのを黙って見ておられる方ではありません。イスラエルの不信仰のゆえに、彼らが死んでいくことを神もつらく思っておられるのです。

だからこそ、神はどんなことをしてでも救いのみわざを進めようとされるのです。私たちがもう一度主に戻ってくるができるように、そして主の恵みに与ることができるように。主御自身がいのちをお捨てになっただけで、救いのご計画を進めてくださっています。その具体的なことは次の聖書箇所

述べられていきます。

私たちを救うために、主が自ら苦しみの先頭に立つてくださっていることを覚えたいと思います。